

## 平成 23 年度 博士前期課程学位論文要旨

## 学位論文題名

統合失調症患者の術後疼痛に関する看護師のアセスメントの特徴

学位の種類： 修士（看護学）

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 看護科学域

学修番号 10894611

氏名：米村法子

（指導教員名：勝野とわ子）

目的：本研究は看護師がどのように統合失調症患者の術後疼痛をアセスメントしているのかを明らかにすることを目的とした。

方法：研究参加者は、身体合併症を罹患した統合失調症患者の受け入れを行っている総合病院に勤務し、精神科経験 3 年目以上、かつ外科系病棟での勤務経験がある看護師 9 名とし、半構造的面接法を用いて面接を行い、統合失調症患者の術後疼痛をどのようにアセスメントしているかを尋ね、質的帰納的に分析を行った。

結果：統合失調症患者の術後疼痛を捉えようとする看護師のアセスメントの実態として、332 コードから、最終的に統合失調症患者の術後疼痛を捉える姿勢、統合失調症患者の術後疼痛を捉える観察項目、統合失調症患者の術後疼痛を捉える判断、統合失調症患者の術後疼痛を捉える難しさの 4 カテゴリーを抽出した。

統合失調症患者の術後疼痛を捉える姿勢では、【術後疼痛を代弁する】という姿勢がある一方で、【術後疼痛を疑う】という姿勢を持つ看護師がいること、統合失調症患者の術後疼痛を捉える観察項目では、一般的にいわれている術後疼痛の観察項目に加え、皮膚の変化を含む【身体的反応の変化】、目に関する変化を含む【表情の変化】、そして【幻覚・妄想の変化】が看護師によって観察されていること、統合失調症患者の術後疼痛を捉える判断では、統合失調症患者の術後疼痛の表現が少ない、曖昧であることによる【術後疼痛の言語的表現がない時の判断】、術後疼痛の言語的表現と他の術後疼痛のサインの一致、不一致を考える【術後疼痛の言語的表現と身体的反応、行動、表情、及び使用した薬剤効果の一致の判断】、術後疼痛の言語的表現が少ないために、患者の様子が術後疼痛によるものか、他のものによるものなかを考え使用する薬剤を選択する【疼痛時、不眠時、不穏時指示薬の選択の判断】、術後疼痛の訴えが統合失調症の症状なのか、身体的なものかを考える【疼痛が妄想や不安か、身体的によるものかの判断】が含まれていた。更に、統合失調症患者の術後疼痛を捉える難しさにおいて、看護師は迷いや自信のなさを感じ、【術後疼痛の把握が難しいことによる介入への躊躇】をしていた。

結論：以上の結果から、看護師は術後疼痛サインの不一致が生じた時にはフィジカルアセスメントを行うこと、何らかの術後疼痛サインがあればケアを行い、判断を明確化していくこと、そして迷いを感じた場面の判断内容を病棟内で共有する必要性が示唆された。